

えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ⑩

赤と黒のコントラストが美しい。これは、松山市の「南江戸闇目(くじゅめ)遺跡」から出土した約800年前の漆器碗である。

漆は、ウルシノキの樹液で、縄文時代から使われてきた天然の塗料である。硬化してしまえば非常に丈夫になる特徴をもつ。木製の器の表面に漆を塗り重ねたものが漆器である。英語ではJapanと呼ばれる日

漆は、ウルシノキの樹液で、縄文時代から使われてきた天然の塗料である。硬化してしまえば非常に丈夫になる特徴をもつ。木製の器の表面に漆を塗り重ねたものが漆器である。英語ではJapanと呼ばれる日

及していく12世紀、13世紀ごろのものと思われる。当資料は黒色の漆器碗で、器の両面には赤色漆でモミジが描かれている。報告書によれば木地はケヤキである。下地が漆か柿渋かは被膜分析をしないとわからない。

この漆器碗が出土した南江戸闇目遺跡は、鎌倉時代から室町時代を中心とする南江戸地域の中世集落のひとつである。南江戸地域には、鎌倉時代初期に建てられたとされる本堂(国宝)をもつ大宝寺がある。寺の南部を流れる宮前川は、三

津浜から南江戸、さらに道後をつなぐ水運路となっており、川の周辺には多くの集落が広がっていた。当遺跡は、周囲の遺跡よりも居住域が大きいことや輸入品である中国製陶磁器が大量に発見されていること、その中に質の良い品が多いことなどから、有力な集落であった可能性が考えられている。この漆器碗も、木地が上質とされるケヤキであり、有力な人物の持ち物だったのかもしれない。

漆器は土中では残存しにくく遺跡から発掘されることはまれであるが、この漆器碗からは、当時の漆芸技術の高さをつかがい知ることができる。土器にはない華やかさを持ち、軽くて丈夫な漆器は当時の人々に希求されたことだろう。

ケヤキ地有力者所有か

南江戸闇目遺跡から出土した漆器碗



南江戸闇目遺跡出土の漆器碗(口径12.15㍉、器高6.6㍉)の④外面と⑤内面―県歴史文化博物館保管

(学芸員・三浦彩)

本資料はテーマ展「絵で見るえひめの遺跡―早川和子氏原画展―」(8月31日)で展示中。南江戸地域の景観を復元した早川和子氏のイラストも展示しているので、当時の様子を想像しながらご覧いただきたい。

〈随時掲載します〉